

JSR 株式会社
2021 年 3 月期第 3 四半期決算説明電話会議 議事録
(2021 年 1 月 25 日開催)

決算補足資料:

https://ssl4.eir-parts.net/doc/4185/ir_material_for_fiscal_ym/94337/00.pdf

P1 決算ハイライト 1

・FY20Q3 実績

- ・当期の業績予想は、新型コロナウイルスの影響下、見通し可能な範囲で織り込んだ内容であり、上期決算時点で業績予想の修正を織り込んでいる。
- ・3Q 累計実績は、コア営業利益で 161 億円と通期 195 億円の見通しに対し 82%と高い進捗率となった。
- ・背景は、半導体材料を中心としたデジタルソリューション事業の好調。又、エラストマー事業、合成樹脂事業は、自動車、タイヤ関連市場の回復により業績の回復が進んだ。
- ・尚、今年度より経常的なビジネスで発生する利益をコア営業利益、事業構造改革等の非経常な要因で発生する損益をノンコア項目として区分けして表記をしている。

P2 決算ハイライト 2

・各事業の対前年同期（YoY）、対前期(QoQ)の比較。

- ・前年同期比は減収減益となった。
- ・デジタルソリューションは、半導体材料が大幅増収で、ディスプレイ材料、エッジ材料は減収。全体では売上収益は増収。利益は増益となった。
- ・ライフサイエンスは CRO 事業を中心に事業が拡大。前年同期は一時的な利益計上により、YoY では減益。
- ・エラストマーは、対前年で、新型コロナウイルスの感染拡大により、世界規模で自動車、タイヤ市場の低迷の影響を受け、販売数量が下落し、大幅な減益、赤字となった。
- ・合成樹脂も同様に主要顧客業界である自動車市場の低迷により販売が減少し、減益となった。
- ・QoQ は増収、増益となった。
- ・デジタルソリューションは増収増益。半導体材料に加え、ディスプレイ材料も販売が好調だった。
- ・ライフサイエンスは増収増益。
- ・エラストマー事業は、1Q を底に販売は回復基調にあり、更に 3Q は大幅に売上利益とも改善した。
- ・合成樹脂も、同様の需要環境により販売は戻り利益も改善した。

P3 セグメント別損益 デジタルソリューション事業

・セグメント別 デジタルソリューション事業。

(環境)

・半導体はロジック、メモリとも堅調に推移。社会の不可欠な産業として、テレワークの進展、データセンター、5G などデジタル技術を活用したインフラ需要の拡大により、顧客業界も高稼働を継続している。ディスプレイ業界は、コロナ影響で 1Q の顧客稼働は低調であったが、テレビやモニター需要の拡大、パネル在庫の引き締めにより、2Q 以降稼働は回復、3Q も好調に推移した。

YoY

・売上収益は対前年増収。半導体材料が+13%と大幅増加。ArF,多層材の先端材料に加え、KRF、i 線等のレジストも好調、又 CMP 材料、新規の洗浄剤も拡大した。

・ディスプレイ材料は売上減少。3Q 累計ではコロナ影響もあり顧客業界での稼働減少の影響を受けた。注力する中国向けは販売が拡大したものの、韓国は顧客が工場閉鎖を含め稼働を大きく落としており販売は減少。

・エッジコンピューティングは、顧客業界の低調に加え昨年度前半に顧客向け販売が積みあがった反動もあり売上減少。

・営業利益は、半導体の増収による数量効果を主な要因とし、ディスプレイ材料もコスト効率化に努め、増益となった。

QoQ

・増収増益となった。

・半導体材料は、好調な 2Q を上回り売上収益は拡大した。顧客業界の好調を背景とする。

・ディスプレイ材料は、前 Q 対比販売増。巣ごもり需要による TV 需要の拡大、又テレワークによる PC、モニター需要の拡大等によりパネル市況は上昇。顧客パネル業界の稼働は堅調に推移。中国パネルメーカーの新規 FAB の立ち上がりも進展した。

・エッジコンピューティングは、赤外線カットフィルター (NIR) が 2Q に販売回復。3Q は対前期では減少した。

・営業利益は増益。主に半導体材料の販売拡大による。

P5 セグメント別損益 ライフサイエンス事業

YoY

・売上高は対前年拡大。前年同期は、一時的な利益計上が発生。その影響で伸び率は低い。

・Crown の CRO 事業が、PDX モデルによる創薬支援サービスを中心に販売増を牽引した。

・営業利益は、昨年の一時的な利益計上の影響による差異により減益。

QoQ

・売上高は QoQ 拡大。Crown の CRO 事業が堅調で売上拡大に貢献。CDMO は KBI にて 2Q に発生した定修の長期化による稼働停止が 10 月後半まで続いたが以降は解消、又受注の増加により売上は拡大。利益

も 13 億円へ増加。OP 率は 10%弱のレベル。

・現在米国にてコロナ対策によるワクチン製造が医薬業界にて優先的に行われており、11 月以降、KBI の生産に必要な資材調達が一部遅れている。生産受託の部分であり、分析、プロセス開発受託については影響ないが、サプライチェーンの安定化に現在努めている状況。

P6 セグメント損益 エラストマー事業

・セグメント別損益のエラストマー事業。

(環境)

・新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、グローバルな自動車生産は 1Q に大幅に落ち込むものの、2Q 以降は急回復が進み、3Q はほぼ前年のレベルまで戻っている。タイヤ生産も同様の傾向。

・国内タイヤ生産も 1H 平均で対前年 30%程度落ち込むも、3Q には対前年 5%程度下落まで回復した。合成ゴム指標である BD は、前年度は\$1,000 近辺も、当期は 1Q に\$350 程度まで下落、市場の急回復で年末に向け\$1,300 水準まで拡大後、足元は\$800-\$850 程度に落ち着いている状況。

・需要全般は 1Q の大幅な落ち込みから 2Q に回復が進み、3Q に向けても強い回復が続いた。

YoY

・大幅な減収減益。営業赤字。

・コロナ影響により販売数量が 1H の時点で約 30%減。この影響により大幅な減収となった。

・差異分析では、数量差がかなりの部分を占めた。顧客業界の稼働調整により、ほぼ全ての合成ゴム品種で販売数量が減少し減益要因となった。価格差は、BD-ナフサスプレッド悪化に加え、原料市況の下落により、相対的に価格が高い原材料在庫の払い出しによる在庫受払差が影響。

・その他、ではグループ企業も減益。在庫圧縮により受払差の差もマイナスとなったが、一方で約 30 億円の発生コスト削減も進めた。

QoQ

・増収及び黒字化となった。

・需要環境は自動車、タイヤ市場の回復によりコロナ影響前の昨年水準となり、更にこれまでの生産縮小の反動で一部顧客では昨年を上回る需要状況となった。市況は BD が前 Q の\$570 程度から当 Q の約\$1,100 とコロナ前を上回るレベルまで回復した。BD-ナフサスプレッドも前 Q の\$170 程度から当 Q は\$700 超となった。

・差異分析では、販売数量は+25%と大幅に改善。自動車用、タイヤ用含めほぼ全ての品種で大幅な戻りとなった。SSBR も同様に大幅な改善となった。価格差のプラスは主に原料の在庫受払差によるもの。

その他、も改善。上期に計上した在庫評価損の戻りが+21 億円程発生している。

P7 セグメント損益 合成樹脂事業

・セグメント別損益 合成樹脂事業。

(環境)

- ・ABS樹脂の需要環境は、3Qを通しては主要顧客業界である自動車業界は大幅に生産が悪化。
- ・原料市況は、主要原料であるスチレン、ブタジエン、アクリロニトリルは、大幅な下落から回復基調に転じ、足元ではコロナ前の水準近くまで戻っている。
- ・汎用ABS樹脂市況も改善の傾向。当社は特殊ABSをメインで扱うため、汎用市場の影響はあまり受けず。

YoY

- ・売上収益、営業利益とも減少。販売数量は自動車向けを中心に国内、輸出とも減少。

QoQ

- ・売上収益、営業利益とも拡大。自動車向けを中心に販売量が大きく拡大した。

P8 連結損益計算書

- ・売上収益は 3,168 億円、対前年 12%の減収。
- ・売上総利益は 947 億円。対前年-13%の減益。売上総利益率 29%。
- ・販売費・一般管理費は対前年ほぼフラット。販売費の減少、半導体材料、ライフサイエンス関係の費用増加。また一部製造原価からの振り替えも含まれる。
- ・コア営業利益は 161 億円。
- ・ノンコア項目は-35 億円。表に示しているとおり事業構造改革費用。9月14日に对外公表したディスプレイ材料の事業再編など。その他、は9月14日に对外公表した転身助成制度関連の費用。
- ・営業利益は 126 億円。
- ・金融収支は支払金利及び為替差損。
- ・当期利益は 67 億円、親会社所有者帰属もほぼ同額。

P9 連結財政状態計算書

- ・資産合計は、7,190 億円となり、前期末から 413 億円の増加。
- ・流動資産は、3,252 億円で、前期末から 217 億円の増加。現金、売掛金が増加。在庫は 97 億円減少。石化製品の需要減少に対応し生産調整を行い、在庫を圧縮した。
- ・非流動資産は、3,938 億円で、前期末から 196 億円の増加。半導体材料、ライフサイエンスの CAPEX による有形固定資産の増加。
- ・負債は 2,963 億円となり、前期末から 560 億円増加した。非流動負債に 5月に発行した社債による資金調達を計上。その他買掛金の増加等。
- ・資本は 4,227 億円で、147 億円の減少。連結子会社である MBL の TOB を実施し 12月に成立。買収額約 100 億円を資本取引処理している。その他、利益剰余金、配当金支払等。

P10 通期予想

- ・通期業績予想は変更なし。
 - ・現在の通期業績予想は 10 月 27 日時点のコロナ影響見通し等をもとに作成している。エラストマー、合成樹脂については下期も-10%程度のコロナ影響を織り込んだ。
- 但し、足元の見通しとしては、不透明要因はあるが、ほぼコロナ前の水準に需要は戻っている。

(各事業の環境)

- ・デジタルソリューション事業は、主に半導体業界の好調により、3Q までの業績は当初想定を上回る進捗であった。ディスプレイ業界も 2Q 以降回復し、3Q はパネル生産も成長に転じた。4Q についても、半導体、ディスプレイとも、旧正月による稼働日数減などにより多少弱まる可能性はあるが、基本的には 3Q の好調な需要環境から大きな変化はないと見ている。又、自動車向け半導体の不足など、グローバルで需要供給の懸念も生じており、状況は注視していく。
- 尚、米国での洗浄剤工場の立上げを 4Q に予定しており、工場の償却が開始される予定。

FY21 に向けても、半導体は引き続きグローバルで堅調な成長が見込まれる。各既存製品群の販売拡大に加え、洗浄剤新工場からの販売拡大、又、EUV フォトリソの立上げなどを通じ、市場成長を大きく上回るトップライン成長を果たしていく見通しである。ディスプレイ業界についても、旺盛な TV 需要等により当面は強い需要環境が続くと見込む。韓国パネルメーカーの現地生産撤退はほぼ終息し、一方中国では新規 FAB の立ち上がり続く。当社では業界の構造変化に対応した事業再編を既に手掛けており、キャッシュカウとしての安定した収益構造の確立が進んでいる。エッジコンピューティング事業も、ハイエンドスマートフォンの需要拡大に対応した ARTON 赤外線カットフィルターの販売拡大が来期に向け本格化していく見通し。

- ・ライフサイエンス事業は、CDMO 事業を始め、顧客とのパイプラインは順調に拡大し、受注も強いことから、需要環境としては短期のみでなく中期的な観点でも引き続き強い状況が続く。4Q の LS 事業は 3Q から拡大を見込む。一方、上述の米国内のコロナワクチン製造をめぐる足元の状況から、生産受託部分は影響を受ける可能性があり、サプライチェーンの安定化に努めていく。

当社の CDMO 事業の成長が期待されるヨーロッパ事業への投資、及び、米国での顧客との共同プロジェクトによる生産能力の増加に関する決定とプレスリリースを行った。これらの投資は拡大するパイプラインや潜在的な顧客ニーズに対応するもの。特に米国でのキャパシティー拡大は、特定顧客の特殊な医薬品開発プロジェクトに結び付いている。FY22 以降に本格売上貢献するが、当投資により生産能力としては既存設備の倍程度まで拡大される見通し。

当社の CDMO 事業は、医薬品業界の流れである個別化、精密化の方向性にポジションを特化し、高度な分析技術、プロセス開発技術を強みとした、複雑なたんぱく質構造を持つバイオ医薬品の開発、生産をターゲットに今後も貢献していく。

10月27日付で医学生物学研究所（MBL）の完全子会社化を目的としたTOBを発表したが、公開買い付けが成立し1月15日付でMBLはJSRの完全子会社となった。当MBLに加え、前述のCDMO事業、PDXモデルに強みのあるCrownのCRO事業、又当社独自のバイオプロセス材料や診断薬材料、更に、次世代に向けた慶応大学との共同研究であるJKiCなど、特徴のある技術をもつ事業、企業群によるグループシナジーを強化し、中長期的な事業拡大を図っていく。

・エラストマー事業は、3Qにはほぼ前年並みの需要環境まで戻り、コロナ影響を織り込んだ当初見込みを上回る水準となった。4Qについても3Qと同水準の需要環境を想定している。4Qに向けては合成ゴム市況の回復により、スプレッドの改善も見込む。SSBRのハンガリー工場が12月に商業生産を開始した。4Qは当工場の償却負担が増すが、SSBRの販売は4Q及び来年度に向けても順調に拡大していく見通し。一方BDは一時的に\$1,300を超えたが、足元\$800-\$900、BD-ナフサスプレッドも\$400程度。コロナ禍の最悪期は脱しているが、依然過去との比較では市況的には厳しい状況と認識している。

・合成樹脂事業についても販売見通しについては、エラストマーと同様に、大幅に回復した3Qの需要環境が4Qも継続する見通し。半導体不足による自動車減産の懸念や、コロナウイルス感染再拡大等による影響などのリスク要因については注視していく。

・新中期計画については3月26日に経営方針説明会を開催することに決定した。当初コロナ影響を鑑み、2月頃に開催したいと申し上げてきたが、緊急事態宣言下であることもあり、この日程で確定させた。開催方法は会場での開催かオンラインでの開催を検討している。新中期計画については、中長期的に、持続性（サステナブル）、強靱性（レジリエント）を備えた事業構造、経営体制を確立し、半導体材業事業やLS事業等の成長事業による企業価値の向上を目指す内容に変わらない。エラストマー事業の事業構造改革については、前回決算で申し上げた通り、抜本的かつ聖域なき観点で検討を進めている。多くのステークホルダーが関係し、コンビナートの位置づけなど複雑な環境もあり、慎重な判断と実行が必要であるが、必要な改革を断行していく計画である。

・又、本日付で社外取締役候補者の選任をプレスリリースした。計4名の候補者で内3名は再任であり、1名は新任となり、米国の投資ファンドであるバリュアクトのロバートヘイル氏を加えた。バリュアクトは、企業への長期投資や投資先の事業再構築などで実績があり、そのパートナーであるヘイル氏は企業の取締役経験も豊富に有する。当社の長期的な企業価値の向上に向け貢献いただけることを期待している。尚、バリュアクトは当社の株主でもあるが、ヘイル氏の取締役の職務遂行は、当社の企業価値向上、全てのステークホルダーの利益のために貢献いただくものとなる。

・最後に、株主還元については、現時点は配当予想に変更はなし。

(APPENDIX)

(エラストマーの損益内訳)

- ・エラストマー事業の損益につき会計要因等も絡んでいるため、参考に内訳を記載している。
- ・過去の四半期ごとのコア営業利益推移を最下段に記載しているが、真ん中の Waterfall には、在庫受払差、評価損、減損の要因を除いたベースの仮の管理利益を参考に表記している。
- ・コロナ影響を背景に、当 1Q に大幅に利益は減少したものの、販売数量の回復に合わせて利益も改善方向にあることが分かる。
- ・3Q については更なる数量の回復で赤字幅も縮小した。当社の販売価格フォーミュラの影響で原料価格の上昇が販売価格に適用されるのに一定のタイムラグがあり 3Q はまだ十分に原料価格の回復が反映しきれていない。4Q に向けては当フォーミュラにより売買スプレッドも改善する見通し。

以上